

## 重度精神発達遅滞児の治療教育に関する研究

— 療育目標としての自己のかかわる世界の構造の発達 —

後 藤 か を り

### I 問 題

従来、殆んどすべての重度精神発達遅滞児に対する療育は、その目標に知的能力の発達・身辺自立等の適応行動の成立を挙げ、その獲得された数量によって彼らの発達が評価され、療育の効果が検討されてきた。しかし、これらの視点からは、どうしても、彼らの変化の微細さ、速度の緩慢さの故に、彼らの発達を過小評価することとなり、的確に把握することができず、その結果、彼らに対する療育の効果まで疑うことになりかねない状況であった。また、この知的能力・社会適応能力・適応行動を問題にする視点は、重度精神発達遅滞児の人間としての発達における意味に関しても疑問が残る。

この意味から、本研究は、重度精神発達遅滞児の療育の目標として、自己のかかわる世界の構造の発達を設定することを提起し、検討しようとするものである。彼らの、環境世界とのかかわりのあり方を問題にすることは、環境が発達の源泉である点、彼らが社会的存在として、他者と関係を持ちつつ生きるという意味から、重要な視点であると思われる。

具体的な検討課題は、次の3点である。

1. 重度精神発達遅滞児の療育に当たって、その目標として自己のかかわる世界の構造の変化という視点を持つことによって、彼らの発達をよりの確に捉えることができるのではないか。
2. 重度精神発達遅滞児の自己のかかわる世界の構造は、十分な条件下でどのような発達の様相を遂げるだろうか。
3. 重度精神発達遅滞児の自己のかかわる世界の構造の発達を規定する要因のひとつとして、彼らの発達を促進するのは、周囲の大人との如何なる対人関係であるのか。

### II 方 法

対象は、昭和48年4月～49年3月、名大教育学部臨床心理相談室の重度精神発達遅滞児療育グループに参加した重度精神発達遅滞児のうちの4人である。いずれも、継続的な集団療育活動には初めて参加した在宅障害児であり、年令4～7才、I・Q 25以下の外因性精神発達遅滞児である。

療育は、1年間、原則として週1回、3時間のsessionを30回持った。1回のsessionは、食事状況をはさんで前半は集団遊戯を中心とした集団の色彩の濃い状況、後半は比較的自由的な個人を重視した状況である。

療育には、原則としてグループとしてのT(therapist)集団があたり、食事介護者として、1人の対象児に1人のmainTがついた。療育は、彼らに内在する発達の力をあくまで尊重し、その開花を援助すること、外側から行動を規制するのではなく、受容的雰囲気の中で彼ら自身の行動変容の意欲を高めること、療育担当者は、社会の中で共に生きる人間としての関係を築こうという姿勢を持つことを基本的方針として行なわれた。

彼らの自己のかかわる世界の構造分析は、基本的に事例研究の手法を採用した。療育担当者のかかわりの体験を重視し、当時者が共感的に理解し得た彼らのかかわる世界を描き出した。同時に、可能な限り客観性を高める為に、かかわりスケールA、Bを作成、3人の療育担当者による評定を行なった。かかわりスケールAは、重度精神発達遅滞児の a) 人間的事象に対するかかわりのあり方、b) 物的事象に対するかかわりのあり方、c) 集団状況でのあり方の3本のストランズから成り、課題1、2検討に用いられた。かかわりスケールBは、課題3検討の為に、療育担当者の対象児との関係の持ち方が問題とされた。

### III 結果と考察

参考までに、対象児一例のかかわる世界の構造の発達の概要を図に示した。

- ①かかわりスケールの評定値の一致率は、各ストランズにおいて、少なくとも2人の評定の一致が80%以上であり、評定の信頼性は一応検証された。
- ②かかわり体験の検討から、重度精神発達遅滞児は、条件が整えば、独自の自己のかかわる世界の構造を主体的に豊かに発達させていくことが示された。更に、この発達は、彼らの適応行動獲得に至る内的発達の理解をも可能にすることが示された。

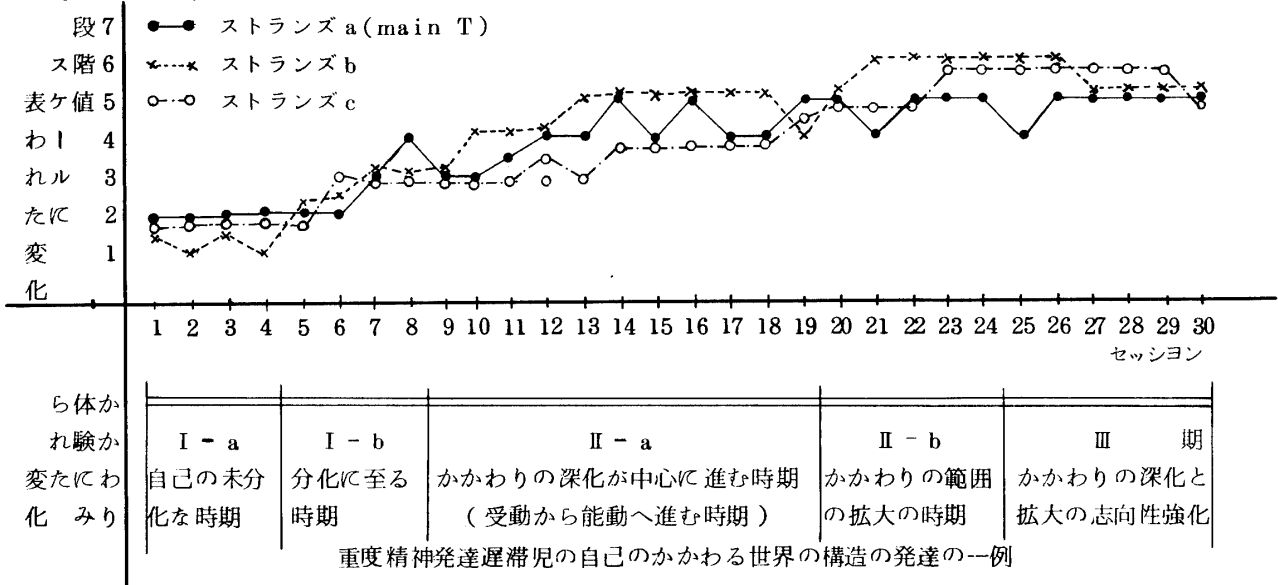
また、かかわりスケールから、人間的事象に対するかかわりのあり方、集団状況でのあり方において、臨床体

験に基く変化大事例は、変化小事例よりも有意に高い評  
定値を示し、かつ変化大事例の初期と末期の差は、変化  
小事例のそれより有意に大であった。

このように、自己のかかわる世界の構造、特に人間的  
事象に対するかかわり、集団状況でのあり方の発達は、  
療育担当者の臨床体験に基いた彼らの全体像の発達とよ  
く対応しており、重度精神発達遅滞児の療育目標として

設定することは妥当であり、彼らの全体発達を的確に捉  
えることを可能にする。

③重度精神発達遅滞児の自己のかかわる世界の構造の発  
達は、集団状況におけるあり方、人間とのかかわりのあ  
り方でよく捉えることができる。特に集団状況でのあり  
方は、彼らの全体像とよく一致している。物的事象に対  
するかかわりのあり方は、彼らの、発達というよりむしろ



ろ、彼らのかかわる世界の構造のあり方、発達の独自性  
を把握するのに有効である。

④重度精神発達遅滞児の自己のかかわる世界の構造の発  
達の様相は、基本的には、その深化、拡大の方向性で捉  
えることができる。また同時に、発達の非常に初期的な  
様相として、かかわる世界の深化・拡大の自発性、能動  
性、志向性の強化の側面も捉えられた。更に、本研究対  
象児の様な障害の重い精神発達遅滞児の、しかも療育の  
初期にあっては、自己のかかわる世界の構造の発達とい  
うよりむしろ形成過程として捉えられる準備過程が存在  
する。それは、本研究対象児からは「未分化→分化」、  
「閉ざされ→開かれ」という様相として捉えることがで  
きたが、この様相は、ひとりひとりに固有な障害のあり  
方、その障害から派生した二次的環境要因によって色濃  
く規定されている様に思われる。

そして、この自己のかかわる世界の構造のあり方は、  
その障害の中の自閉的障害の有無、精神発達遅滞児の母  
子関係にみられる特徴的な2つのあり方と結合して、重  
度精神発達遅滞児の心理学的類型を形成することが推察  
される。療育のあり方を検討する基盤としての、この心  
理学的類型を確立させることが今後必要であろうと思わ  
れる。

⑤周囲の大人との対人関係においては、Tから水準の高

いかかわりを得ており、かつ特定の、他のTより深いか  
かわりを持つTが存在している。また同時に、対象児の側  
からも、その特定のTに、選択的・持続的に深いかかわ  
りのあり方を示している。この3条件を満たしているも  
のが、変化大事例であった。

このように、重度精神発達遅滞児の自己のかかわる世  
界の構造の発達を促進・援助する条件は、彼らの周囲に、  
彼らと、社会の中で共に生きる人間として共に歩もうと  
する人の存在である。しかし、特に重度精神発達遅滞児  
においては、それのみでは十分でない。彼らは、未だ周  
囲の環境世界に含まれる刺激を自らの発達の糧として獲  
得するという、環境との基本的な関係が成立していない  
ことが多い。従って、彼らと周囲の大人との間に現実に  
築き上げられた対人関係のあり方が、より直接的に、彼  
らの発達に影響を及ぼすものと考えられる。すなわち、  
彼ら自身が、かかわり手との関係をどのように体験して  
いるのかが重視されなければいけない。

更に、重度精神発達遅滞児の療育にあっては、集団状  
況と同時に、彼らが以上の様な対人関係を体験できるの  
に十分な、特定の人との接触が必要であることも示され  
た。